

第6回学校再編計画策定委員会記録

- 1 日 時 令和2年9月4日(金)午後1時30分～午後4時40分
- 2 場 所 牧之原市役所相良庁舎4階大会議室
- 3 参加者 委員10人全員出席
島田桂吾、横田恭子、櫻井真弓、小柳津敏法、石神綾子、服部真和、
種茂和男、赤堀康彦、増田ひとみ、良知恵里香(順不同・敬称略)

4 概 要

目指す学校像、学校区及び学校数、学校の場所等について、策定委員会として考え方をまとめる。まとめた意見について市民意見を聴取し、それを踏まえて計画素案の作成をしていく。

○ 目指す学校像

- ・ 目指す学校像は、全体的にはこの概要図でよい。図の見せ方についてはソフト面⇒ハード面に修正する。
- ・ コンセプトは、「みんなの学校」。子どもが中心だが、子ども、教員と地域がみんなですべてをつくって、みんなが行きたいと思う学校にしたいという思いが入っている。再編すると地元から距離的には離れるが、新たな地域、新たな関わり方で学校をつくっていくという意味でも、能動的な意味合いとしてよいと考える。
- ・ 追加で入れる項目としては、「自己肯定感」、「たくましさ・しなやかさ」など子どもたちの資質・能力の部分。前回の方針にも入れたが今回も特出しする。
- ・ 施設のところには感染症対策のしやすさも入れる。
- ・ インクルーシブについては、可変性、複合化等も散りばめながら表現を考える。
- ・ オンラインができるようになったことも加味して、学校へ行く意義が問い直されている中で、学校があるからこそできること、学校へ行くことの楽しさを分かってもらう必要がある。

○ 学校数

- ・ 校数は、現在は2校か3校かの2案を併記している。2校については、場所は変わるかもしれないが、旧榛原町・旧相良町に1校ずつで合意されている。3校の場合は牧之原小中を残すという1択になっている。併記とするか、原則2校だが牧之原小中学校については高台開発の状況と地元との相談で見極めて判断する、のどちらかの表現にするか。

- ・ 望ましい教育のあり方に関する方針では、「学校の規模は1学年3学級以上を基本とし、建築後20年間は単学級にならないものとする」と言い切っている。原則とは書いていない。そのため、この方針通りに行くと2校だが、少し外れる部分が出るという意味では併記ではなく、腹案として但し書きの方がいいのではないか。
 - ・ 方針で「単学級としない」としているのは、子どもたちの多様な体験の場を確保するという意味で少ない人数でなく、ある程度の人数を確保するということがある。
 - ・ 高台開発の住宅の予定は、60～70世帯程度。高台開発で人口増えるというが、企業誘致がされて、住宅が整備されて子どもがいる世帯が住めばいいが、未知数な状態。
 - ・ 2校となった場合は、牧之原小中学校は、学組であり菊川市との調整が必要。旧相良町・旧榛原町、菊川市の子どもたちがどのように通うのか。分かれて通う場合は配慮が必要となる。一方で方針の規模もある。
 - ・ 表現は少し考えるが、現時点でいうと高台開発の今後が読めないため、方向性としては、2校で、牧之原小中学校については、但し書き的な位置付けにする。2校の表現をベースに、牧之原小中学校は、高台開発と子どもたちの通学の分散、あり方方針の流れがあるので引き続き検討する。ということをもとに但し書きの中に入れてものを示して、地元の意見を聞いて、今後の素案づくりの参考としていく。
 - ・ 中学校が学組となる地頭方については、相良地域に入る方向で考えているが、その意図がしっかりと分かるように「地頭方小学校の子どもたちは牧之原市で新設される小中学校に通う」という方向性を追記する。
- **学校の形態**
- ・ 施設一体型の施設をつくる。義務教育学校を目指しつつも、具体的には学校基本構想で検討する。
- **学校の場所**
- ・ 学校の場所は、地図に示されている3か所でよい。
 - ・ 津波浸水想定区域外という言葉だけが入っているが、いろいろな災害に安全な場所を選んだ。ということを示す。
 - ・ 都市計画のマスタープランと同じ考えてやっていることが分かった方がいい。通学路の整備等は、まさに市のまちづくり、都市計画と合わせてやっていかないといけない。
- **通学方法**
- ・ 通学路への配慮は必要。それが通学方法にも絡んでくるが、一番遠くなる子どもへの配慮や駐車場の確保が必要。
 - ・ 通学方法を考えるときには、距離だけでなく通学時間も考慮する必要があるのではないか。

- ・ 現時点の基準と合わせて何%くらいが自転車やバスになるかの確認をしておく。
- ・ 学年、距離を考えて子どもが安全を確保できる方法とするという言葉にある程度集約できる。子どもが安全に通学できることを最優先で考えながら検討していく。

○ 複合化・共有化

- ・ 地域が使えるようにという意見や災害時の視点があるが、地域によってできるところとできないところがあるため、今後検討していくということによりかと思う。
- ・ 牧之原市の公共施設の中で現在不足しているもの、欠けているものを、今回の学校で共有することにより解決するものがあれば、よりよいものができる。「市民と共有できる工夫をして活用していく」という表現がよいかと思う。
- ・ コミュニティルームは、普段は地域の人が活動したり子どもたちと交流したりできる場所として活用できて、さらに災害時の拠点としても使える工夫をすることができるとよい。新しいところはこういうふうに見えるようにしようというイメージを持って、学校再編計画の後の学校基本構想に入っていく。

○ 空き施設の利活用

- ・ 利活用については、バスの発着場所、民間へ払い下げ等の意見が出たが、どんな活用ができるか可能性調査していく。
- ・ 利活用の検討には、活用検討委員会のようなものが必要ではないか。校舎の建設に入る裏番組的に跡地利用をしっかりと考えていく。

○ スケジュール

- ・ 全体スケジュールについてはよい。2022年までに学校基本構想を検討する段階で空き施設の利活用検討委員会を立ち上げて並行して考えていければと思うが、ここの部分は市役所内で検討してもらいたい。